

東北文化研究センターの取り組み

菊地 和博



菊地と申します。どうぞよろしくお願ひいたします。私どもの東北芸術工科大学は、1992年にスタートして、今年で16年目になります。大学内にある東北文化研究センターは、東北の歴史風土に根差した研究センターです。歴史風土に根差した研究というのは何かというと、厳しい風土の中でも豊かな大地に花開いた文化があることに注目して、それに根差した研究・教育を行ない、その先駆けとなりたいたいということです。

東北文化研究センターは、センター長・副所長・研究員というメンバーで構成されています。センターがスタートしたのは、1999年4月です。1年ぐらひは準備期間的なものでした。小さな部屋で所長の赤坂憲雄あかさかのりおさんと事務職員だけがいるようなそういうスタートの仕方でした。私は、もともと高校教員をしていましたが、センターの2年目から研究員として大学教員になりました。したがって、実質はメンバーがそろった2000年の4月にセンターがスタートしています。また、1999年にセンターがスタートしてから、最初に発行した機関紙が『まんだら』でした。現在では、36号まで発行を重ねています（2008年10月17日現在）。

本当にささやかなスタートを切ったのですが、最初は赤坂さんと私と研究員合わせて4人でスタートしたのが、いつの間にか大変充実したスタッフになりました。スタッフ全員がセンターの専属であるわけではなくて、大学の歴史遺産学科に所属する歴史・民俗・考古の教員がスタッフと

して配置されて教育に当たっているわけです。歴史遺産学科と東北文化研究センターは、絶えず連携をとりながらセンターの研究を進めています。例えば、研究員の入間田宣夫いるまのだのぶおさんは、歴史遺産学科の教授なんです。私は、9月まで専任のセンターの研究員だったんですが、10月1日から歴史遺産学科に移籍後、准教授と東北文化研究センターの研究員を兼務しています。福田正広ふくだまさひろさんも歴史遺産学科の専任講師であり、センターの研究員です。私と今日一緒に参りました岸本誠司きしもとせいじさんは、東北文化研究センター専属の研究員ということでばりばり働いていただいております。また、『まんだら』の編集長もしていらっしゃいますし、たくさん仕事を抱えています。このように、歴史遺産学科と連携して、東北文化研究センターが運営されています。

次に、センターが進めている、文化による地域づくりの取り組みについて、実践事例をご紹介します。例えば、一つに文化庁の「ふるさと文化復興事業」がございます。これは、2002年度から受託研究として東北文化研究センターが山形県を通じていただいた研究です。各市町村の伝承文化、例えば芸能や和紙づくりや機織りといった伝承技術を補助するという事業なんです。ただお金だけを補助するのではなくて、山形県として、あるいは大学として、そういう地域に根差す伝承文化を今後どのように育てていくのか、また大学教育の中でどのように活かしていくことができるか、あるいは私たち大学人がどのようにそこに関わりたいのか、そういう一つの展望を持った取り組みをしていくという考え方のもとで、受託研究を引き受けています。例えば、地域伝統文化活性化マスタープランを作成したり、実地調査、研究業務に従事しております。どのように地域を活性化するのか、あるいは文化による地域活性化をどのように展望していくかといったものをまとめて、県と文化庁に提出するという作業しております。また、実際に市町村に入り込んで団体からの聞き取り調査と指導助言を行なっています。

そして、年度末には報告書のようなものをつくっています。例えば、2005年度は、山形県教育委員会からの受託で、東北文化研究センターが編集・執筆をいたしまして、「伝承文化による

地域づくり実践事例集」を出しています。また、2006年度の報告書は、「置賜^{おきたま}地方に見る伝承文化と地域社会」、そして、2007年度は「山形県置賜地方南部のシシ踊りと地域社会」ということで、シシ踊りという芸能に限定した取り組みで、シシ踊りがどのように地域社会の活性化に役立っているか、あるいは役立つことが可能かということの研究した報告書でございます。このような形で報告をまとめています。

また、「山形ふるさと塾」形成事業にも関わっています。そこでは、「地域に根づく伝承文化に対して私どもはどのような関わりかたをすれば良いのか」ということをいろいろと検討しています。実際の事業としては、11月9日に子供たちを集めて、上山^{かみのやま}市体育文化センター・エコーホールで、県内の小学生が地域に根づく伝承文化を継承している発表と交流の場を設ける計画をしています。私は、この「山形ふるさと塾フェスティバル」実行委員会の委員長をさせていただいております。私は民俗学の中でも、芸能を専門としていますので、そうした立場から子供にいろいろと指導・助言をして、さらに交流と発表の場を設けるということまで関わっています。

それから、山形^ま県^{むらがわ}真室^{ほんがく}川町には番楽という芸能がありまして、それも支援しています。例えば、10月12日に開催された「番楽フェスティバル」（真室川町・同町教育委員会主催、東北文化研究センター後援）は、今年で16回目を迎えました。私どもの大学は、フェスティバルの後方支援をしました。その中で、私は全面的にそれに関わって、実際に地元へ赴いて、指導・助言をいたしました。

さらに、「移動セミナー授業」も行なっています。私どもが地域に出かけていき、その地域にふさわしい文化による活性化の話し合いをしたりするわけですが。例えば、私と3人が出かけていきまして、大友義助先生（雪の里情報館名誉館長）という民俗学の研究者も、パネリストとしてシンポジウムに入らせていただいております。私どもは、そのようにして、地域に出かけて行って、それぞれの歴史・風土に根差した活性化策などを話し合う場を設けています。

それから最後に、「高校生のための地域学ゼミナール」を今年も開催し、「火の民俗と文化」と

いうテーマで、山形^{おおくら}県大蔵^{ひじおり}村の肘折温泉まで高校生と親御さんに来ていただいて、連続講座を行ないました。私どもの研究員が5人ほど出かけて行って、地域の高校生や親御さんたちと1泊2日で、夜は灯籠流し、精霊流しなどを体験し、昼は一緒に散策して温泉に泊まったりと、積極的に地域間の交流を図るための方策を展開しました。私はそこで、民俗芸能という地域文化を根^こ子にした地域づくり・活性化策を手がけて行って、そこで一緒に指導や助言あるいは話し合いをしました。そうした取り組みを、大学の授業やゼミの中で活かしていただいております、センターの取り組みと大学の授業の循環を試みています。

私が今お話した以外にも、センターにはさまざまな取り組みがあります。その一つとして、センターが発行している雑誌・研究誌がございます。設立当初から出している雑誌である『東北学』。それから地元の詩人で地域から思想を発信した真^ま壁^{かべ}仁^{じん}を研究する『真壁仁研究』。これは、私どもにとって学ぶものが多いと思った人物をずっと研究している雑誌です。あと菅江真澄^{すがえまさみ}を研究テーマとした『真澄学』や、『舞台評論』、『研究紀要』があります。私が編集責任で出しているものとして、『最上川文化研究』という雑誌もあります。

第1期目のオープン・リサーチ・センターは、「東アジアの中の日本文化に関する総合的な研究」という研究テーマでしたが、これは特にアジアを主として研究したものでして、私は韓国^{チェジュ}の済州島に何度か行って多面的な調査をしました。

現在、オープン・リサーチ・センター整備事業は第2期目に取り組んでおります。研究テーマは「東北地方における環境・生業・技術に関する歴史動態的総合研究」です。私が携わっているプロジェクトでは、地域とのかかわりをテーマとして、民俗芸能を主とした地域社会に注目しております。その1つとして、東北固有の芸能である山伏^{やまぶしかぐら}神楽の調査研究をしています。外部の研究者は11人で、ロシアの研究者も加わっております。